

変化事象とヲ格の振る舞い

菅井三実（兵庫教育大学）

0. はじめに

本稿では、現代日本語の他動詞文および自動詞文において変化事象に見られるヲ格成分の特異な振る舞いを取り上げ、認知言語学で援用される一般的な認知能力との関係から、記述と説明の妥当性を検討したい。

第1節では、ヲ格成分を伴う他動詞構造において変則的に見える現象についても知覚的な特性によって自然な説明を与える。第2節では、自動詞構造の中でヲ格成分が実現する現象を取り上げ、その意味構造を明らかにし、第3節において本稿における分析の妥当性を検証する。

1. 他動詞文とヲ格成分

第1節では、ヲ格成分を伴う他動詞構造において、規範的な意味構造を踏まえ、変則的に見える現象についても知覚的な特性によって自然な説明を与えることを試みる。

日本語の他動詞は、形式的にヲ格成分をとるとされるが、ヲ格成分をとる動詞の中にも、次の(1)のように、ヲ格成分に影響を与えるもの(働きかけがあるもの)と、(2)のようにヲ格成分に影響を与えないもの(働きかけがないもの)が観察される。

- (1) a. 朝早く母親が花子を起こす。
b. 花子がパソコンを壊す。
- (2) a. 花子を待つ
b. 花子を想う

ヲ格成分標示の多様性については仁田(1993)で詳説されているが、他動詞文で変化を被るものは原則としてヲ格成分で標示されるという記述は妥当性が高い。

- (3) a. 子どもに計算を教える。
b. 子どもを教える。

(3a)は、広義の移動表現であり、その変化主体はヲ格成分の「計算」であって、その「計算」という技能が「子ども」に届けられて定着するというプロセスを描くとする、ニ格で標示された「子ども」は意味役割として着点と解釈される。これに対し、(3b)の「子ども」は、ヲ格成分で標示されていることから、この分析の妥当性は次のペアとの対比によって明確になる。

- (4) a. 機械に計算を教える。
b. ? 機械を教える。

(4a)は、(3a)と同様に「計算」が変化主体となり、それが「機械」にプログラムされるプロセスを描いており、ニ格成分の「機械」は意味役割として着点と解釈されるが、(4b)において、「機械」がヲ格成分で標示できないのは、「教える」という事象において「機械」に変化を起こすとは解釈されがたいためということになる。

上に挙げた(1)～(4)の例から、基本的に〈ガ格成分＋ヲ格成分＋他動詞〉の構造において、変化を被るのはヲ格成分であって、ガ格成分やニ格成分ではないことが確認されたが、他動詞文構造の中のヲ格成分に関しては特異な現象が観察される。その現象というのは、他動詞パターンに一種の「図地反転(**figure-ground reversal**)」が起こり、ガ格成分の方に主たる変化が生じるというものであり、次のように例示される。^[1]

- (5) a. 太郎がボタンを外した。
b. 太郎が席を外した。

(5a)は通常他動詞パターンで、ガ格成分の「太郎」が「機動者(**initiator**)」としてヲ格成分の「ボタン」に働きかけを加え、その結果「ボタン」が位置的な変化を被る。問題になるのは(5b)であって、述語動詞「外す」が(5a)と同一でありながら、ガ格成分の「太郎」からヲ格成分の「席」に働きかけを加えるものの、ヲ格成分の「席」が変化を被らないために、結果として実質的には「太郎」の方が位置的な変化を被るというものである。このとき「XがYを外す」の構造において「Xからの働きかけによってYと距離が離れる」という含意は(5a)でも(5b)でも変わりなく、(5b)が(5a)と本質的に異なるのは、前景的な図(**figure**)と背景的な地(**ground**)とが反転しているところにある。すなわち、(5a)のような通常他動詞文ではヲ格成分の「ボタン」が図(**figure**)として知覚されるのに対して、(5b)ではガ格成分の「太郎」が運動を被るため図(**figure**)として知覚され、ヲ格

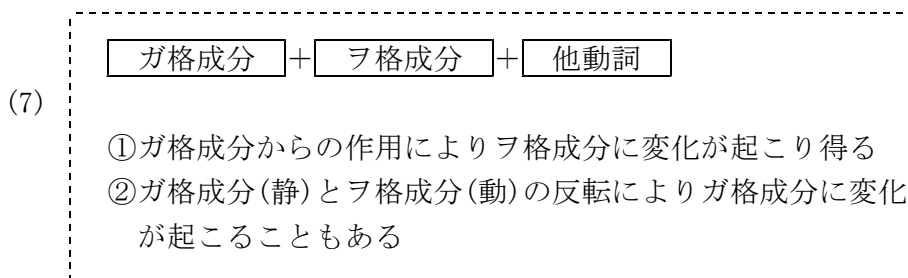
成分の「席」は運動の軸を提供する背景的な地(ground)として知覚されたとい
ってよい。

同様のことは次の例にも言える。

- (6) a. インターネットの歴史を調べると、1969年にアメリカの4つの研究機
関が、ARPANET と呼ばれる最初のインターネットを始めたと言わ
れている。
b. ついに、田舎の祖父がインターネットを始めた。

(6a)ではガ格成分の「研究機関」が働きかけの主体となって、ヲ格成分の「イン
ターネット」に〈無〉から〈有〉への変化を生じさせている点で、ノーマルな格
関係で解釈されるのに対し、(6b)において、主たる変化が起こっているのはヲ格
成分の「インターネット」ではなく、ガ格成分の「祖父」であって、事実上、「祖
父」の変化に関する描写と言ってよい。

ここまでの観察と考察は、次のように整理できる。



この現象の認知的基盤を知覚の特性に求めることは自然なことであろう。すなわ
ち、動いているものを固定すると静止しているものが動くように知覚されるとい
う原理であり、卑近な例で言えば、日常生活の中で、路上から電車の通過を見る
とき、その場合の移動主体は、当然、電車であるが、電車に乗っている乗客の目
から見ると、路上の人が動いているように見える。



観察者が電車の中から見るとき、観察者が環境的自己の視点に立つと、静止しているものが動いているように見える。動くものを静止して見ると静止しているものが動くように見える。

上述の分析に関して、2つほど事例を追加しておきたい。次の例では、下線部に「村を捨てる」という表現が見られる。

- (8) a. バラバーク村には、大昔から井戸がなかったのです。皆汚い川の水を飲み、わずかな小川だけが命綱でした。私も子供の頃の仕事は、ここから二里ほどはなれた泉に飲み水を取りに行くことでした。[中略]
昨年夏、その泉が涸れ果て、小川の水も尽きた時、ほとんどの村人は村を捨てることを考えました。(中村哲『医者井戸を掘る』より)
b. バンドが下手だから店を変えることにした。

「捨てる」という動詞が表す意味構造は、ガ格成分の働きかけでヲ格成分が位置変化(状態変化)を起こす関係であるが、(8)において、主たる変化を被るのはヲ格成分の「村」ではなく、ガ格成分の「人々」の方であり、(7)の②にいう反転が起こっている。(8b)は、バンドの生演奏をするクラブでの発話で、違う店(クラブ)に移動しようとしているところである。

このことは、動詞が移動動詞以外的时候でも有効である。

- (9) a. 太郎が作業をやめた。
b. 太郎が仕事をやめた。
c. 太郎が会社をやめた。

(9a)では「作業」に変化が起こるのに対し、(9b)では「仕事」の続行が中止されるという解釈と「太郎」が変化を被るとの解釈で曖昧になる。また、(9c)では「会社」の経営を終止するという解釈は非常に弱く、「太郎」の退職という解釈が優勢になる。^[2]

以上、図地反転という認知能力を援用すれば、(5b)、(6b)、(8)、(9)のような現象を無理なく説明できることが示された。

2. 自動詞文とヲ格成分

本節では、〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉構造を取り上げる。

通常「ヲ格成分」をとらない自動詞の中には、対立する他動詞が存在するにもかかわらず、併存する自動詞を用いて〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉構造をな

すものが観察される。例えば、次の2組のペアにおいて、(10a)の他動詞構造に対し、同様の事象を(10b)のような自動詞構造で表すことも可能である。

- (10) a. 仕事をかえる / 病室を移す / 話を終える
b. 仕事をかわる / 病室を移る / 話を終わる

このようなペアが並立するとき、問題になるのは、形態的に明確に対立する他動詞「終える」や「移す」が併存しながら、通常「ヲ格成分」をとらない自動詞「終える」や「移す」を用いた〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉が一体どのような意味をなすかという点である。以下において、李(2001)の言うような構文論的な観点から〈ヲ格成分+自動詞〉の構造を明らかにしていきたい。

(10b)のような〈ヲ格成分+自動詞〉の構造を分析するに当たり、次のような例を取り上げることとしたい。

- (11) a. 仕事をかわる
b. 病室を移る
c. 話を終わる
d. 悪戯を見つける
e. 選択を間違う
f. 手を触れる

(11a)の「仕事をかわる」では「かわる」という自動詞がヲ格成分と共起しているが、この中の「かわる」を盧(1992)は、自動詞ではなく他動詞であると述べており、森田(1990:336)は、このような用法そのものを「濫用」と述べている。それでも、「かえる」という他動詞が対応することから言えば、(11a)の「かわる」は自動詞と扱うべきであって、(11a)の用法そのものも決して容認度の下がる構造ではない。このほか、(11b)～(11e)でも、動詞「移る」「終わる」「見つかる」「間違う」が自動詞であることは、それぞれ、対応する他動詞「移す」「終える」「見つける」を持つことから明らかであり、(11)は、いずれも〈ヲ格成分+自動詞〉の構造をもつことが確認できる。

その上で、(11)に挙げた構文について論理的に導かれるのは、ヲ格成分に変化が生じることであり、次の(12)のように関係を示すことができる。

- (12) a. 仕事をかわる → 仕事がかわる
b. 病室を移る → 病室が移る

- | | | | |
|----|---------|---|---------|
| c. | 話を終わる | → | 話が終わる |
| d. | 悪戯を見つける | → | 悪戯が見つかる |
| e. | 選択を間違う | → | 選択が間違う |
| f. | 手を触れる | → | 手が触れる |

この(12)が示しているのは、〈Xガ+Yヲ+自動詞〉の構造において〈Yガ+自動詞〉の関係が成り立つという論理的な含意の成立である。(12a)では矢印左側の「仕事をかわる」に対して矢印右側の「仕事がかわる」が成立し、(12b)～(12f)でも同様である。ただ、(12b)においてヲ格成分の変化は〈属性の解釈〉に限られ、「病室を移る」で変化するのは「病室」そのものではなく、「病室の部屋割り」であり、それが“病室 α ”から“病室 β ”に変化したという解釈であることは言うまでもない。^[3]

同時に注目すべきは、〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉は〈ガ格成分+ヲ格成分+他動詞〉と異なり、ガ格成分にも変化が及ぶことである。このことは、次のように、ヲ格成分を抜いた文を作ることによって明示的に確認できる。

- | | | | |
|---------|------------|---|---------|
| (13) a. | 花子が仕事をかわる | → | 花子がかわる |
| b. | 花子が病室を移る | → | 花子に移る |
| c. | 花子が話を終わる | → | 花子が終わる |
| d. | 花子が悪戯を見つける | → | 花子が見つかる |
| e. | 花子が選択を間違う | → | 花子が間違う |
| f. | 花子が手を触れる | → | 花子が触れる |

この(13)は、〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉の構造においては〈ガ格成分+自動詞〉の関係が成り立つことを示している。実際、(13a)では矢印左側の「花子が仕事をかわる」に対して矢印右側の「花子がかわる」が成立し、(13b)～(13f)でも同様である。(13c)における「花子が終わる」の容認度に疑問をもつ人がいるかもしれないが、例えば「花子が終わったら、次は太郎のスピーチだ」のような文脈であれば十分に容認される。

(12)と(13)を統合すると、次の(14)のような関係が導き出される。

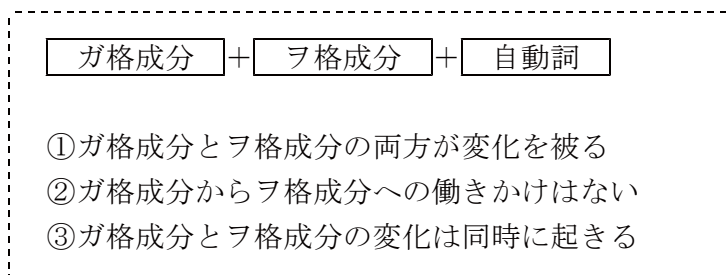
- | | | | | | |
|---------|------------|---|---------|---|---------|
| (14) a. | 花子が仕事をかわる | → | 花子がかわる | + | 仕事がかわる |
| b. | 花子が病室を移る | → | 花子に移る | + | 病室に移る |
| c. | 花子が話を終わる | → | 花子が終わる | + | 話が終わる |
| d. | 花子が悪戯を見つける | → | 花子が見つかる | + | 悪戯が見つかる |

- e. 花子が選択を間違ふ → 花子が間違ふ + 選択が間違ふ
 f. 花子が手を触れる → 花子が触れる + 手が触れる

この(14)が示しているのは、〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉の構造においては〈ガ格成分＋自動詞〉と〈ヲ格成分＋自動詞〉の両方が成り立つということであり、(14a)で言えば、「花子が仕事をかわる」というとき、「花子がかわる」と「仕事がかわる」の両方が成立することを示している。

ここで重要なことは、〈ガ格成分＋自動詞〉と〈ヲ格成分＋自動詞〉の両方が成り立つというとき、両方の変化が〈同時的〉に生じるという点である。(14a)における「花子が仕事をかわる」というのは全体として1つの事象であり、そこから含意される「花子がかわる」と「仕事がかわる」は全体としての事象の中から2つの下位側面を取り上げたものであるから、「花子が仕事をかわる」と「花子がかわる」は同時に起きると見るべきものである。同様に、(14b)の「花子が病室を移る」においても、「花子が移る」と「病室が移る」ことは全体としては1つの事象であるから、時間的にも同時に起きるものとみるのが当然である。(14c)～(14f)においても同様である。このことを含めて、上述の分析を整理すると次のようになる。

(15)



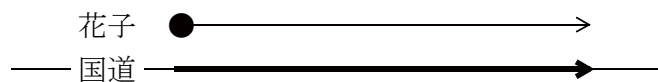
これら3つの要件が〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉構造のスキーマ的意味記述である。^[4]

(15)に挙げた①～③の要件は、[対象]のヲ格だけでなく、次の(16a)のような[経路]のヲ格や、(16b)のような[時間]のヲ格にも有効である。

- (16) a. 花子が車で国道を走る。
 b. 花子が波乱の人生を生きる。

(16a)において、ガ格の「花子」が空間的に位置変化するのに伴って、ヲ格の「国

道」にも軌跡において「漸進的な変化」が生じるというのは、「花子」の移動という出来事と、「国道」における経過部分(=「国道」の中で「花子」が移動した領域)の変化が同期的に進行するからである。



ここでいう「漸進的な変化」というのは、Dowty(1991:572)が「原型被動作主(proto-patient)」の1つに挙げた「漸進的(incremental)」という概念に相当する。Dowty(1991:568)の説明によれば、「漸進的」とは、出来事の進行する過程と主題(目的語)に係わる変化の過程が並行的(同期的)に進行することをいう。例えば、John built the house. であれば、建設という出来事の進行と the house の変化(完成に至る状態の変化)が並行的に進行し、出来事の終了とともに the house の変化も終了する点で、「漸進的」とされる。この特性は、変化を被る対象でない目的語であっても「漸進的な主題」になり得るという。同様のことは、(16b)のような時間次元にも適応可能であろう。(16b)において、ガ格の「花子」が「生きる」という事象は、ヲ格の「人生」における経過部分の変化と同期的に進行する。いずれのケースでも、ガ格成分とヲ格成分が同時的に変化するという固有の特性に変わりはないことが分かるだろう。^[5]

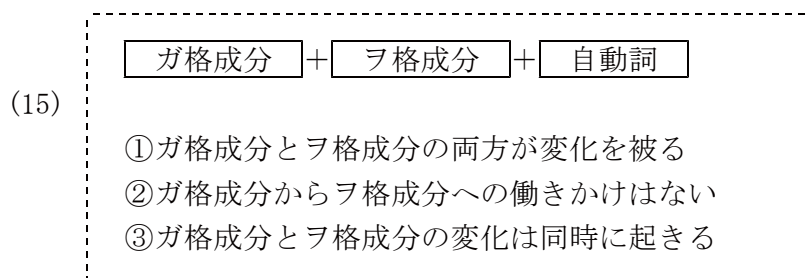
以上から、(14)の一般化をもって〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉の意味構造とするというのが本節の結論である。

3. カテゴリーの不均質性と妥当性の検討

前節で見たように、〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉の意味構造は、(14)のように一般化されるというのが本稿の分析であるが、この構造にはカテゴリーとして不均質性が観察される。本稿で取り上げている〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉の構造は、先述の(14)を含め、(17)や(18)のように例示できるが、(17)や(18)には、(14)と部分的に異なる性質が観察される。^[6]

- | | | | | | |
|---------|------------|---|---------|---|---------|
| (14) a. | 花子が仕事をかわる | → | 花子がかわる | + | 仕事がかわる |
| b. | 花子が病室を移る | → | 花子に移る | + | 病室が移る |
| c. | 花子が話を終わる | → | 花子が終わる | + | 話が終わる |
| d. | 花子が悪戯を見つける | → | 花子が見つかる | + | 悪戯が見つかる |
| e. | 花子が選択を間違う | → | 花子が間違う | + | 選択が間違う |
| f. | 花子の手が触れる | → | 花子が触れる | + | 手が触れる |

- (17) a. 花子が電話をかわる → 花子がかわる + 電話(の話し手)がかわる
 b. 花子が運転をかわる → 花子がかわる + 運転(=する人)がかわる
- (18) a. 花子が公園を歩く → 花子が歩く + *公園が歩く
 b. 花子が人生を生きる → 花子が生きる + *人生が生きる



ここに再掲した3つの要件のうち、(15)の①により、次のような現象を説明することができる。

- (19) a. ?? 花子がメールアドレスをかわる。 奥野(2005:161)
b. 花子がメールアドレスをかえる。

- (20) a. ?? 大輔はボタンをはずれた。 須賀(1981:559)
b. 大輔はボタンをはずした。

(19a)や(20a)が成立しないことについては、①から説明できる。すなわち、(19a)が成立しないのは、「メールアドレスがかわる」というヲ格成分の変化は認められても、それと同時的に「花子がかわる」というガ格成分の変化が認められないためであり、(20a)が成立しないのも、「ボタンがはずれた」というヲ格成分の変化は認められても、それと同時的に「大輔がはずれた」というガ格成分の変化が認められないためということになる。

(15)の①の一般化によって、同様の状況下で他動詞が成立しないケースに説明を与えることが可能になる。例えば、顧客から部長の秘書に電話があり秘書から部長本人に交代したことを描写するとき、次のペアのうち(21a)の自動詞構造が容認され、(21b)の他動詞構造は容認されない。

- (21) a. 秘書が部長に電話をかわる。
b. ?? 秘書が部長に電話をかえる。

このペアでは、(21a)のように自動詞を使えば両方変化するが、(21b)のように他動詞を使うと電話が変化し秘書が変化しない。(21a)のように自動詞「かわる」のとき「電話の相手＝秘書」から「電話の相手＝部長」にかわるのであって、ガ格成分に変化が生じるのに対し、(21b)のように他動詞「かえる」のとき「秘書の電話」と「部長の電話」が交替するのであるから、この点でガ格成分には変化が生じない。このとき、(21b)のような他動詞文「電話をかえる」が成立しないのは「電話」に関して属性の変化としての解釈が困難なためと説明される。つまり、物質的に「電話」を「別の電話」と交換するという値の変化が比較的容易であるのに対し、“話をしている人”を属性として“秘書”から“部長”にかわるという属性の変化として解釈することは経験的に難しい。

また、(15)の②により、次の現象を説明することができる。

- (22) a. 花子が話を終わった。
b. ?? 花子が話を始まった。

上でも取り上げたとおり、(22a)のように「終わる」であれば〈ヲ格成分＋自動詞〉の構造で成立するのに対し、(22b)のように動詞を「はじまる」にするときは容認されなくなる。この差異について、(22a)では「花子」が行動(活動)を終了して「花子が終わった」状態になれば必然的に「話が終わった」状態になるのに対し、(22b)が容認不可能になるのは、「話が始まる」ためには「花子」からの働きかけが必要であり、この点で(15)の②と矛盾するためと説明できる。

さらに、(15)の③によって、次の現象を説明することができる。

- (23) a. 花子が仕事をかわった。
b. ?? 花子が気持ちをかわった。

(23)のペアでは、自動詞「かわる」に対して、(23a)のようにヲ格成分が「仕事」のときは容認可能なのに対し、(23b)のようにヲ格成分が「考え」のときは容認不可能になる。この差異について、(23a)が容認可能なのは、「仕事がかわった」とき、それと同時に「花子がかわった」という関係が成立するからなのに対して、(23b)が容認不可能になるのは、「気持ちがかわった」からといって同時に「花子がかわった」という関係が成立するわけではないためと説明される。

最後に、非対格仮説の観点からの分析と本稿の分析とを比較しておきたい。影山(1996:286-287)は概念意味論の枠組みで非対格仮説の観点から分析し、ヲ格成分と述語からなる基底構造に主語が追加されたとの分析を与えている。^[7] しかし、このような非対格仮説に基づく分析は、次のような例によって反証される。

- (24) a. 花子が悪戯をみつかった。
b. ?? 花子が悪戯をばれた。

- (25) a. 花子が_____みつかった。
b. ?? 花子が_____ばれた。

(24a)のように述語が「みつかった」のときは〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉の構造が成立するのに対し、(24b)のように述語を「ばれる」にすると成立しなくなる現象について、(24)のペアにおける容認度の差異は、(25)のような〈ガ格成分＋自動詞〉における容認度の差異と並行的である。すなわち、(24a)が成立

することと並行的に(25a)も成立するのに対し、(24b)が成立しないことと並行的に(25b)も成立しないことから、(24)のような〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉が成立するためには、(25)のような〈ガ格成分＋自動詞〉が成立しなければならないはず、逆に、(25)のような〈ガ格成分＋自動詞〉が成立しないときは、(24)のような〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞〉は成立しないというものである。

また、非対格仮説に基づく分析は、次の例からも反証される。

- (26) a. 決勝戦は2対0で前半を終わりました。
b. 決勝戦は2対0で前半まで終わりました。

もし、基底に“前半が終わる”という構造が仮定されるなら、「前半」はガ格成分かヲ格成分で実現されなければならないことになるが、(26b)が示すように「マデ」で標示される可能性も認められる。基底レベルという抽象的な次元においてさえ「前半戦」を一次的な項として設定するのは、少なくとも「前半戦」の格標示が「マデ」やゼロ実現の可能性をもうつという言語事実を正しく反映しない。結論的には〈ガ格成分＋自動詞文〉の基本構造にヲ格成分が挿入されて〈ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞文〉の構造が構築されたというのが本稿の分析である。

5. 結語

本稿では、他動詞構造のヲ格成分と自動詞構造のヲ格成分について特異な現象を取り上げ、説明を与えることを試みた。本稿での分析は、次のように整理できる。

- [i] [ガ格成分＋ヲ格成分＋他動詞]構文においては、ガ格成分からの作用によりヲ格成分に変化が起こるが、ガ格成分(静)とヲ格成分(動)の反転によりガ格成分に変化が起こることもある。
- [ii] [ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞]構文においては、ガ格成分からヲ格成分への作用がない中で、ガ格成分の変化に伴ってガ格成分とヲ格成分が同時的に変化するものと分析できる。
- [iii] [ガ格成分＋ヲ格成分＋自動詞]の構造は[ii]によって一元的にカテゴリー化されるが、ヲ格成分の変化においてカテゴリー内に不均質性(プロトタイプ効果)が見られる。

以上により、一見変則的な現象についても、一般的な認知能力を援用することで無理のない説明を与えることができたと思われる。本稿で取り上げられなかった

中間構文(他動詞構造においてヲ格成分が実現されないもの)については、別稿で詳述したい。

注

*本稿は、日本認知言語学会第17回全国大会におけるシンポジウム「日本語研究から認知言語学的文法研究への貢献」において「変化事象とヲ格の振る舞い」と題して口頭発表した内容に基づくものである。一緒に登壇した鍋島弘治朗先生(関西大学)、堀川智也先生(大阪大学)、町田章先生(広島大学)のほか、貴重な質問とコメントを頂戴した森雄一先生(成蹊大学)、吉本一先生(東海大学)ほかフロアの皆さんに感謝の意を表したい。

- [1]ここでの分析については、菅井・黛(2005)に詳しく論述した。
- [2]変化を被る主体が、格標示においてガ格成分かヲ格成分に限られるという一般的性質について、例外的なケースがあり、定延(1990)が詳説しているように、有標の動機づけを与えれば他動詞文でもガ格成分に変化を被らせることも可能であるが、ここでの例文にはあてはまらない。
- [3]このような自動詞構造におけるヲ格成分の意味について、鈴木(1985)は「対象」といい、寺村(1982)は「対象」的性格と述べる一方、福島(1988, 1991)は「移る」や「かわる」と共起するヲ格成分を「移動補語」と分析し、奥野(2005)は「経路のように思われる」と述べているが、本稿では、このヲ格成分を[対象]と分析する。なぜならば、〈ヲ格成分+自動詞〉においてヲ格成分が変化を被るからであり、変化を被るものは原理的に[対象]にはほかならないからである。
- [4]本稿で取り上げている〈ガ格成分+ヲ格成分+自動詞〉に関して、認知言語学的な論考に姚艷玲(2007)があり、〈支配性〉〈主体性〉〈一体性〉という3つの要件を提示しているが、このうち、(11)に挙げた例から〈主体性〉は非関与的な要因であり、〈支配性〉と〈一体性〉については〈同時性〉に還元されるというのが本稿の立場である。
- [5]単行本のタイトルに、「老いを生きる」「現代社会を生きる」「ガンを生きる」「チェロを生きる」のような修辭的な用法が見られる。ここでも「生きる」主体がヲ格成分の変化と同時的に進行するという意味構造が読み取れる。森雄一(2012:52)では「がんを生きる」のような書名について、「がんにかかった人生」を表すメトニミーになっていると分析しており、本稿の分析を加味すれば、そのような「人生」と、患者本人(=主語)が一体的に生きていく姿を表す表現と解釈することができる。
- [6]水谷(1964)は「～を終わる」の用法と「～を走る」の用法を別物と見ている

が、本稿では(14)のグループと(18)のグループを一元的に扱う立場をとる。
[7]正確には、[S [VP Arg V]]のように表記され、Arg(=項)とV(=非対格動詞)でVPを形成し、それにS(=主語)が付加されるという。

参考文献

- 荒井文雄(1992)「移動動詞の意味構造とアスペクト極性」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第14巻・第1号, pp. 55-105.
- 岩本遠億(2001)「空間関係を表す『を』格と行路の稠密性について」『言語科学研究』第7号, pp. 13-42.
- 宇都宮裕章(1996)「ヲ格成分補語に対する動詞の性質」『共立国際文化』第9巻, pp. 1-20.
- 奥野浩子(2005)「使役交替と変化—『かえる』と『かわる』の意味構造」『弘前大学 人文社会論叢. 人文科学篇』第13号, pp. 157-166,
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版.
- 国広哲弥(1996)「日本語の再帰中間態」言語学林1995-1996編集委員会(編)『言語学林』三省堂, pp. 417-424.
- 定延利之(1990)「移動を表す日本語動詞述語文の格形表示と、名詞句指示物間の動静関係」『言語研究』第98号, pp. 46-65.
- 島田昌彦(1971)『国語における自動詞と他動詞』明治書院.
- 須賀一好(1980)「併存する自動詞と他動詞の意味」『国語学』第120輯, pp. 112-141.
- 須賀一好(1981)「自他違い—自動詞と目的語、そして自他の分類—」馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会(編)『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店, pp. 543-567.
- 須賀一好(1990)「〈終了〉の意味と自他の形態」『日本語と日本文学』第13号, pp. 20-27.
- 須賀一好(1999)「動詞『かわる』の意味と自他」『山形大学日本語教育論集』第2号, pp. 69-78.
- 菅井三実・黛穂高(2005)「言語能力と認知機構の互換性に関する覚書」『兵庫教育大学研究紀要』第27巻, pp. 63-71.
- 杉岡洋子(1996)「自動詞と共にあらわれるヲ格成分表現をめぐって」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第28号, pp. 243-256.
- 鈴木英夫(1985)「『ヲ+自動詞』の消長について」『国語と国文学』第62巻・第5号, pp. 105-116.
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

- 盧 顯松(1992)「『かわる』の他動性」『言語』第21巻・第10号(1992年9月号), pp. 84-89.
- 福島直恭(1988)「『病室を移る』と『病室を移す』——名詞の意味と文法的現象——」『静修短期大学研究紀要』第19号, pp. 26-42.
- 福島直恭(1991)「他動性と自動性の対立の解消に関する一考察」『学習院女子短期大学紀要』第29号, pp. 107-122.
- 水谷静夫(1964)「『話を終わる』と『話を終える』」森岡健二(他編)『口語文法講座3: ゆれている文法』明治書院, pp. 45-60
- 森 雄一(2012)『学びのエクササイズ レトリック』ひつじ書房.
- 森田良行(1990)「自他同形動詞の諸問題」『国文学研究』第102集, pp. 331-341.
- 姚 艷玲(2007)「日本語のヲ格成分名詞句を伴う自動詞構文の成立条件——認知言語学的観点からのアプローチ——」『日本語文法』第7巻・第1号, pp. 3-19.
- 李 在鎬(2001)「他動詞文のゆらぎ現象に関する『構文』的アプローチ」『言語科学論集』第7号巻, pp. 1-20.
- Dowty, David R. (1991) Thematic proto-roles and argument selection. *Language*, 67(3), pp. 547-619.

< abstract >

On change events and σ -marked noun phrases in Japanese

Kazumi SUGAI

(Hyogo University of Teacher Education)

The present paper aims at giving an explanation to change events and σ -marked noun phrases within the transitive and intransitive structures in terms of the symbolic view of grammar. The present research has analyzed the phenomena in (2b) as reversing Figure (moving entity) with Ground (static entity). In the transitive structures, the σ -marked NP *botan* (button) is typically affected by the ga -marked NP *Taro* as in (1a).

- (1) a. Taro-ga botan-o hazusu
Taro-NOM button-ACC take_off
“Taro undoes the buttons (of his coat).”
- b. Taro-ga seki-o hazusu
Taro-NOM seat-ACC take_off
“Taro leaves his seat.”

In (1b), however, the σ -marked NP *seki* (seat) is NOT affected to change in location, but the ga -marked *Taro* changes in location by the figure-ground reversal.

In the intransitive structures, on the other hand, the σ -marked NP is generally not present, but in some intransitive structures, σ -marked NP is present as in (2a) and (2b) below.

- (2) a. Taro-ga shigoto-o kawaru
Taro-NOM job-ACC change(intr)
“Taro changes jobs.”
- b. Taro-ga seki-o utsuru
Taro-NOM seki-ACC move
“Taro moves from a seat to another.”

In (2a) and (2b) the predicative verbs *kawaru* (change) and *utsuru* (move) are both intransitive verbs, but the σ -marked noun phrases *shigoto* (job) and *seki* (seat) are present. The present research has given the apparently unusual structures as in (2) to the schematic requisites such as; [i] both of the ga -marked NP and the σ -marked NP change, [ii] the ga -marked NP does not affect the σ -marked NP, and [iii] the change in the ga -marked NP and that of the σ -marked NP are concurrent.